

各関係機関長 殿

岡山県病害虫防除所長  
(公印省略)

病害虫発生予察情報について

病害虫発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成29年度病害虫発生予報第4号

平成29年7月3日  
岡山県

予報概評

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水 稲	葉いもち	やや遅	並
	穂いもち	やや遅	並
	紋枯病	並	<b>やや多</b>
	ヒメトビウンカ	—	並
	縞葉枯病	—	並
	ツマグロヨコバイ	—	やや少
	ニカメイガ	—	並
	セジロウンカ	—	やや少
	トビイロウンカ	並	並
斑点米カメムシ類	—	並	
モ モ	せん孔細菌病	—	<b>やや多</b>
	灰星病	—	やや少
	モモハモグリガ	—	やや少
	ナシヒメシンクイ	—	<b>やや多</b>
	ハダニ類	—	並
ブドウ	晩腐病	—	並
	べと病	—	並
	うどんこ病	並	並
	フタテンヒメヨコバイ	やや遅	やや少
	チャノコカクモンハマキ	—	並
果樹共通	カメムシ類	—	やや少
キュウリ	べと病	—	やや少
	うどんこ病	—	並
	褐斑病	やや遅	やや少
	炭疽病	やや遅	やや少
キュウリ・ナス	ミナミキイロアザミウマ	—	やや少
トマト	疫病	やや遅	やや少
	葉かび病	やや遅	やや少
(アブラナ科野菜) ダイコン	軟腐病	—	<b>やや多</b>
	キスジノミハムシ	—	<b>やや多</b>
	コナガ	—	<b>やや多</b>
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	並
	アブラムシ類	—	並
	モザイク病	—	並
キ ク	白さび病	やや遅	少
	ハダニ類	やや遅	やや少
	アブラムシ類	—	並

1. 普通作物

(水 稲)

(1) 葉いもち

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月19～22日の巡回調査では、葉いもちの発生を認めなかった（平年の初発生確認：6月第6半旬）。

イ. BLASTAM-メッシュ岡山版（以下、ブラスタム）による葉いもちの感染好適条件は、6月25日に県内で比較的広域に出現した。6月29日までのブラスタムの結果は下表のとおりである。

ウ. 6月29日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 補植用の苗は、伝染源となるので処分する。

イ. 箱処理剤を使用していない圃場では、発生を確認後は速やかに防除を行う。箱処理剤を使用している圃場で発生を確認した場合は、箱処理剤と同系統の薬剤の使用を避ける。

ウ. 現時点で未発生圃場でも耐病性の弱い品種（コシヒカリ、あきたこまち、ヒノヒカリ、朝日）は初発後の病勢の進展が速いので、早期発見、早期防除に努める。

エ. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

表 アメダスデータから推測される葉いもちの感染好適条件の出現状況  
(BLASTAMメッシュ岡山版)

地帯区分	北部地帯					中部地帯					南部地帯				
	上長田	千屋	奈義	古町	新見	久世	津山	福渡	和気	高梁	岡山	虫明	倉敷	笠岡	玉野
6. 15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21	○	—	●	●	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	●
22	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	○	—	●	●	—	●	●	●	●	●	—	●	●	●	—
26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—
27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28	—	—	—	—	—	—	—	—	●	●	●	●	—	●	●
29	—	○	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

●：感染好適条件 ○：準感染好適条件 —：感染好適条件は現れなかった

(2) 穂いもち (極早生種対象)

予報内容

発生時期 やや遅  
発生量 並

予報の根拠

- ア. 極早生種の生育は概ね平年並である。
- イ. 6月19～22日の巡回調査では、葉いもちの発生を認めなかった(平年の初発生確認:6月第6半旬)。
- ウ. BLASTAM-メッシュ岡山版(以下、ブラスタム)による葉いもちの感染好適条件は、6月25日に県内で比較的広域に出現した。
- エ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

- ア. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長される。

(3) 紋枯病

予報内容

発生時期 並  
発生量 **やや多**

予報の根拠

- ア. 6月19～22日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。
- イ. イネの茎数は概ね平年並である。
- ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、やや発病を助長する条件である。

(4) ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容

ヒメトビウンカ(第2世代幼虫)  
発生量 並  
縞葉枯病  
発生量 並

予報の根拠

- ア. 赤磐市の予察灯において、6月5半旬まで成虫は誘殺されていない(平年の第1世代の初誘殺は6月2半旬)。6月1～5半旬の飛来数は0頭で、平年(9.7頭)より少なかった。
- イ. 6月19～22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)による発生圃場率は36.0%で平年(46.8%)よりやや低く、1地点あたりの成幼虫発生量は2.8頭で平年(2.0頭)よりやや多かった。
- ウ. 近年の県南部における縞葉枯病の発生は、平年並で推移している。

(5) ツマグロヨコバイ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 やや少

- ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初誘殺は5月6半旬で平年(6月1半旬)よりやや早く、6月1～5半旬の飛来数は11頭で、平年(105.1頭)より少なかった。
- イ. 6月19～22日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は4.0%で平年(9.4%)より低かった。
- ウ. 6月19～22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、成幼虫の発生量は0頭で平年(1.1頭)より少なかった。
- エ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. ツマグロヨコバイが媒介する萎縮病は、近年巡回調査において発生を認めていない。

(6) ニカメイガ (第1世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて6月5半旬までに平年同様誘殺を認めていない。

(7) セジロウンカ

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月19～22日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は1.3%で平年(6.3%)よりやや低かった。

イ. 6月19～22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、1地点あたり成虫発生量は0頭で平年(1.1頭)より少なかった。

ウ. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の飛来数は0頭で、平年(12.8頭)より少なかった。

エ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(8) トビイロウンカ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市及び真庭市の予察灯において平年同様6月5半旬までに飛来を認めていない。

イ. 6月19～22日の巡回調査において発生を認めなかった。

(9) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の誘殺数は26頭で平年(57.6頭)よりやや少なかった。

イ. 6月26日の県北部イネ科牧草地のすくい取り調査(20回振り)では、アカスジカスミカメの発生量は1地点あたり40.3頭で平年(19.8頭)よりやや多かった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. イネ科植物の穂は餌であり、産卵場所でもあるため、水田周辺のイネ科植物は除去する。ただし、穂の付いたイネ科植物をイネの出穂2週間前から出穂後3週間の間に除去すると、カメムシを水田に追いやることになるので避ける。

2 果 樹

(モ モ)

(1) せん孔細菌病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

- ア. 6月21日の巡回調査によると、発生圃場率は21.6%で平年(16.5%)よりやや高かった。
- イ. 県南部の7月下旬のモモせん孔細菌病の発生助長要因である「昨年の8月中旬の発生ほ場数」は多い(岡山県病害虫防除所調査)。
- ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

- ア. 本病は、風雨によって発病が助長される。
- イ. 次作における伝染源量を減少させるために収穫後の防除を徹底する。

(2) 灰星病

予報内容

発生量                    やや少

予報の根拠

- ア. 県予察圃場における6月23日の幼果の発病果率は4.8%で、平年(9.9%)より低かった。
- イ. 4月下旬の巡回調査では花腐れの発生圃場率は平年よりやや高かったが、6月21日の巡回調査では果実での発生は認めていない。
- ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、やや発病を抑制する条件である。

(3) モモハモグリガ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量                    やや少

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて第2世代成虫の初飛来は6月8日で、発生時期は平年(6月15日)より早かった。
- イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は2頭で、平年(74.0頭)より少なかった。
- ウ. 6月21日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(3.5%)より低かった。
- エ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(4) ナシヒメシンクイ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量                    **やや多**

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は16頭で、平年(13.9頭)並であった。
- イ. 6月21日の巡回調査における新梢被害発生圃場率は24.3%で、平年(16.5%)よりやや高かった。
- ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(5) ハダニ類

予報内容

発生量                    並

予報の根拠

- ア. 6月21日の巡回調査における被害発生圃場率は21.6%で、平年(22.4%)並であった。
- イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

ない。

(ブドウ)

(1) 晩腐病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月の降水量は平年よりやや少なかったことから、幼果の感染は平年よりやや少ないと考えられる。

イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、やや発病を助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. ベノミル剤(ベンレート)及びアゾキシストロビン剤(アミスター)に対して感受性が低下した耐性菌が本県各地で確認されている。

(2) ベと病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 県予察圃場では、平年(6月21日)並の6月23日に初発病が認められた。

イ. 6月21日の巡回調査において発生圃場率は35.7%で、平年(10.6%)より高かった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を抑制する条件である。

防除上の参考事項

ア. 梅雨時期の連続降雨により急に病勢が進展する可能性がある。

イ. ブドウベと病に登録のあるストロビルリン系殺菌剤(アゾキシストロビン剤、クレソキシムメチル剤、ファモキサドン剤)に対する耐性菌が本県の一部で確認されている。本系統の殺菌剤の使用は1作期1回とし、他系統の殺菌剤と組み合わせて使用する。

(3) うどんこ病

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月21日の巡回調査において、トンネル被覆栽培での発生を認めていない。

イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(4) フタテンヒメヨコバイ(第2世代幼虫)

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月21日の巡回調査において発生を認めず、発生圃場率は平年(1.3%)より低かった。

イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(5) チャノコカクモンハマキ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は2頭で、平

年(3.4頭)並であった。

イ. 6月21日の巡回調査では平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(果樹共通)

(1) カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は30頭で平年(109.9頭)より少なかった。

イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は、75頭で平年(569.0頭)より少なかった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

3. 野菜

(キュウリ)

(1) ベと病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場(5月10日定植)では発生を認めず、発病葉率は平年(24.0%)より低かった。

イ. 6月22、23日の巡回調査によると、発生圃場率は25.0%で平年(58.2%)より低かった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、やや発病を抑制する条件である。

(2) うどんこ病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 県予察圃場(5月10日定植)において、発病葉率は4.9%で平年(3.6%)並であった。

イ. 6月22、23日の巡回調査では、発生圃場率は37.5%で平年(57.6%)よりやや低かった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(3) 褐斑病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場(5月10日定植)において、平年同様発生を認めなかった。

イ. 6月22、23日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(24.5%)より低かった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(4) 炭疽病

予報内容

発生時期 やや遅  
発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 県予察圃場（5月10日定植）において、平年同様発生を認めなかった。
- イ. 6月22、23日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年（6.2%）より低かった。
- ウ. 6月29日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

（キュウリ、ナス）

（1）ミナミキイロアザミウマ

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 6月22、23日の巡回調査によると、露地、施設栽培のナス及びキュウリでの発生量は少なかった。
- イ. 6月29日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

（トマト）

（1）疫病

予報内容

発生時期 やや遅  
発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 6月22、23日の巡回調査によると、県南部の露地栽培及び県北部の雨除け栽培では発生を認めず、発生圃場率は平年（8.3%）よりやや低かった。
- イ. 6月29日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を抑制する条件である。

（2）葉かび病

予報内容

発生時期 やや遅  
発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 6月22、23日の巡回調査によると、県南部の露地栽培及び県北部の雨除け栽培では発生を認めず、発生圃場率は平年（28.8%）より低かった。
- イ. 6月29日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、やや発病を抑制する条件である。

防除上の参考事項

- ア. 本病の初発生時期（雨除け栽培トマトでは6月下旬～7月上旬）と病勢進展時期（7月下旬～8月上旬）に効果の高い殺菌剤を予防散布する防除体系は、葉かび病の防除に有効である。
- イ. 一部地域で Cf-9 を持つ抵抗性品種を侵すレースが確認されているので、発生を認めた場合には速やかに防除対策をとる（平成22年度植物防疫情報第4号参照）。
- ウ. 本県では、トマト葉かび病に類似した病徴を示すトマトすすかび病の発生が認められている。肉眼での判別は困難であるが、顕微鏡下で観察すれば、トマトすすかび病菌の分生子が細長い形状であることから葉かび病とは容易に区別できる（平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号参照）。

（アブラナ科野菜）

（ダイコン）



(1) 軟腐病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月22、23日の巡回調査によると、発生圃場率は25.0%で平年(10.0%)よりやや高かった。

イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、やや発病を助長する条件である。

(2) キスジノミハムシ

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(3) コナガ

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)におけるフェロモントラップへの誘殺数は59頭で、平年(17.6頭)より多かった。

イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を特に助長する条件ではない。

(野菜共通)

(1) ハスモンヨトウ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)のフェロモントラップの誘殺数は72頭で、平年(67.5頭)並であった。

イ. 6月22、23日の巡回調査によると、ナス、トマト、キュウリでの発生は認められず、発生圃場率は平年(0%)並であった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(2) アブラムシ類とアブラムシ伝搬性のモザイク病

予報内容

発生量 アブラムシ類 並

モザイク病 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は207頭で、平年(250.7頭)よりやや少なかった。

イ. 県予察圃場(赤磐市)における6月下旬のキュウリでのアブラムシ類の発生量は平年並であった。モザイク病は、平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月22、23日の巡回調査では、アブラムシ類の発生量はキュウリでは平年よりやや少なく、トマトでは平年よりやや多かった。モザイク病の発生圃場率は、キュウリでは0%で平年(10.6%)より低かったが、トマトでは40.0%で平年(15.6%)より高かった。

エ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. モザイク病の発病株は伝染源になるので早めに除去し、アブラムシ類の防除を行う。

#### 4. 花 き

(キ ク)

##### (1) 白さび病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 少

予報の根拠

ア. 6月22、23日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(15.0%)より低かった。

イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発病を抑制する条件である。

##### (2) ハダニ類

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月22、23日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(9.7%)より低かった。

イ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

##### (3) アブラムシ類

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は207頭で、平年(250.7頭)よりやや少なかった。

イ. 6月22、23日の巡回調査によると、発生圃場率は33.3%で平年(12.7%)よりやや高かった。

ウ. 6月29日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

この情報は、岡山県病虫害防除所ホームページでも公開しています。アドレスは、[http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec\\_sec1=239](http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239) です。

